



指揮：太田弦

©aiueda



司会・ナレーター：竹平晃子

©井村重人



前回の様子

神奈川フィルオーケストラ・キャラバン 静岡公演2025

交響曲「田園」を

語りと共に楽しむ特別な演奏も

子どもから大人まで幅広い世代が楽しめるクラシックコンサートとして、2022年からグランシップで開催している「神奈川フィルオーケストラ・キャラバン」。親子で初めてオーケストラを体験する方ももちろん、「オーケストラの演奏は、あまり聴いたことがないけれどチャレンジしてみたい！」という方や、神奈川フィルハーモニー管弦楽団が奏でる本格的なクラシック音楽をリーズナブルに楽しみたいという方にも人気を集めています。

今回もオーケストラの迫力やハーモニーをたっぷり味わいながら、様々な形でクラシックの魅力に迫ります。優れた奏者たちが繰り広げる超絶技巧の演奏をはじめ、ベートーヴェンの交響曲「田園」では語りを交えた特別な構成。言葉に導かれながら、楽曲に秘められた物語や風景に思いを

巡らせましょう。音楽を耳で聴き、楽器や音を奏でる奏者の動きを目で見て、想像を広げて楽しめるコンサートです。

今回神奈川フィルを率いるのは、太田弦さん。読売日本交響楽団や東京フィルハーモニー交響楽団など、日本の著名なオーケストラで実績を重ねる注目の若手指揮者です。司会・ナレーションを務めるのは、アナウンサーの竹平晃子さん。クラシック音楽に造詣が深く、全国各地の音楽イベントでコンサートナビゲーターとして活躍しています。さらにソリストも加わり、神奈川フィルと共に豊かな音の世界を届けてくれます。夏休みの体験としてぜひご予約ください。

神奈川フィル オーケストラ・キャラバン静岡公演2025

7/27(日) 14:00～

■ 中ホール・大地 ■ 一般2,500円、こども・学生1,000円(4歳～28歳以下) ※3歳以下入場不可

【出演】指揮：太田弦、管弦楽：神奈川フィルハーモニー管弦楽団、司会・ナレーター：竹平晃子 他

【曲目】ベートーヴェン：交響曲第6番 へ長調 Op.68「田園」 他 ※曲目は変更になる場合がございます。

最新情報は
こちらから



「鳥の声」に耳を傾けて

ベートーヴェンの「田園」は5つの楽章それぞれに標題があり、親しみやすい交響曲。「小川のほとりの情景」を冠した第2楽章終盤には鳥の鳴き声が描かれています。フルートがナイチンゲール(サヨナキドリ)、オーボエがウズラ。クラリネットが奏でるカッコウは特に分かりやすいのでご注目を。

vol.41 地に根を張る花、天の雲を^{とよ}遏む音。

伝統芸は知るものではなく、

身につけるもの。

岩下尚史

私が二十歳台の頃の話ですから、今から四十年ばかりもむかし、銀座六丁目に小松ストアという、和洋の逸品を粒選りの瀟洒な百貨店がありました。

今はギンザコマツと名を替えて、コムデギャルソンの川久保玲監修のファッションセレクトショップなど、明治以来、先進性を看板として来た銀座の老舗らしい品揃えは変わらず、趣味のいい顧客に愛されていますが、私の若かった八十年代のパブル前夜は今よりもなお、華奢風流をたしなむ人の数も多く、その目利きも確かであったように思い出されます。

この老舗の方針のひとつに、良質な文化を売るという、いかにも好景気時代らしい理想が掲げられていました。

実際、通りに面した飾り窓には四丁目の和光と好一对の趣向に富んだ商品展示がなされ、そぞろ歩きの人たちの眼を楽しませたものでしたが、小松ストアのほうはより鷹揚な態度を見せており、商品と

は別に常時いけばなが添えものではなく、創作家のオブジェとして飾られていました。

その見るからに向新性の感じられる、勁い、烈しい、それなおおしやれな作品を楽しみに見に来る往來の人も増え、若者が海外のハイブランドの洋装に親しむようになった頃の、しなやかな銀座名物のひとつになっていました。

当時、銀座の劇場に勤めていた私も多分にもれず、作品の足元に置かれた金属板に「假屋崎省吾」とあるのを、まぶしい思いでながめていたことを思い出します。

それから間もなく、その假屋崎さんが新橋演舞場の観客を迎える玄関の花を担当なさることになり、お互いに初めて名乗りあったのですが、今とは違い、髪の内髪を刈り上げ、どこやら文科系シティブойイ然たる風貌ながら、仕事ぶりはきびきびとめざましいもので、一朝にして国家的な文化事業をも手掛ければ、今日の大を成されたことは御案内のとおりです。

假屋崎さんの作品は絢爛かつ艶美ですが情弱で邪淫なところが少しもないのは御人柄なのでしょう。

鉄などの人工物で構成なさる時も、私はそこに大地に根を張る「花」を感じるのが常であります。

何かのテレビ番組で、お母様が質実なお暮しのなか、少しでも土があれば種を蒔き、苗を植え、花々をお咲かせになっていたと知りましたが、幼かった假屋崎さんの心にも、それが芽を吹き、根を張ったものが見えます。

華道家としての多彩な活動のなかでも、シヨパンの弾き手として誉れある横山幸雄氏との共演は久しいもので、文字どおり琴瑟の友ならではの共鳴の歓びに満ち、これまで多くの観客の心に花を咲かせて来ました。

花の季節のおとずれに、いさゝか、推奨する所以であります。



TV・ラジオでコメンテーターとしても活躍。
作家・岩下尚史氏のコラムが好評連載中。

岩下尚史(いわしたひさふみ)…作家。國學院大學客員教授。新橋演舞場(株)退社後、芸者の発生と変遷について著した『芸者論』にて、新人としては異例の第二十回和辻哲郎文化賞を受賞し、本格的な作家活動を開始。その他、三島由紀夫の恋人への取材を基に書き下ろした『見出された恋』、『ヒタメン』などの著作がある。また、日本の伝承芸能や古典的な暮らしについてのエッセイ等も多数著している。現在、季刊『美しいモノ』(ハースト婦人画報社)にてエッセイを連載中。また、現在、新刊発表に向け、鋭意執筆中。

